

日本のポンパイ

～ 渋川市の遺跡を探る ～

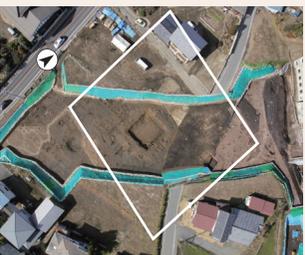
No.19

『金井下新田遺跡(2) 囲い状遺構の形』

金井型網代垣あじろがきで囲われた大規模な施設を「囲い状遺構」と呼んでいます。古墳時代の首長が眠る墓が古墳なら、囲い状遺構は、金井に生きた首長の「まつりごとの場」といえる施設です。とはいえ、具体的な性格は研究途中のため、結論はもう少し先になりそうです。

さて、囲い状遺構の形を見ることにしましょう。驚くのは高い規格性によって造営されていることです。1・8畝を基準に照合すると、囲い状遺構の設計図が浮かび上がってきます。東・西辺48・6畝、南・北辺54畝の長方形が基本的な設計で、中央に1辺9畝の大型竪穴建物や高床建物が配置されています。さらに、その間には垣根があり、東区画と西区画が分割され、まるで公的な場と私的な場に区分けされているように見えます。

ところが、発見された囲い状遺構は平行四辺形なのです。何故か？基本的な設計をもとに、東辺を固定したまま西辺を北に移動すると発見された平行四辺形の形になるのです。どうして整然とした長方形の外郭をわざわざ平行四辺形にしたのでしょうか。



▲白線が囲い状遺構

謎を解くカギは、北側に傾斜した北辺にありました。北辺から西を望むと神奈備山かんなびやま(神が宿る山)とみられる吾妻山あづまやまが屹立し、その谷間には聖水を湧出する和尚沢があるのです。囲い状遺構は、基本設計をもとにしながら、神奈備山や水源も構成要素として取り込んだ重要施設と考えられるのです。

(泉埋蔵文化財調査事業団 専門調査役 原 雅信)